

六花



俳句雑誌 りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

6

野苺にちらと脇目をふりにけり
とら刈の羊ほほえみきたるかな
みごもれるひつじに芝の青みけり
六甲の桐散るときどきどきどき
馬陰に入りたる山羊の目に青葉
おお牧場はみどり山羊さん羊さん
青芝にばらばらばらり山羊の糞まり
逆子かもしれぬ羊へ薄暑かな
老鶯にきりこんでくる不如帰
夕さりやこぼれつぎたる忘れ藤
水差の中をみどりの夜風かな
晚餐を前に眼下の朴の花
鶴啼いてをりけり夢の糸口に
摩耶山を枕にひと夜ほととぎす



万緑に目覚む産まれてきしごとく
傘もたぬ男に摩耶の青葉冷
紫陽花に仏母ぶつもの色のさしきたる
青葉しておもと阿闍梨の雨衣
荒雨や摩耶天上の著莪の花
梅雨霧に縁を浄めてをりにけり
石庭に吸込まれゆく青葉雨
宿下駄の鼻緒ぬらしぬ藤の雨
なめくじらよりも嫌はれ蝸牛
ハンカチの花覗き込む濡ねずみ
花あやめ背中濡ぬらしの傘の中
麦秋へ寄道をして送りけり
胡蝶蘭咲いて縁えにしと名づけけり

石井としみさんに貰った蘭

雪 卿 集

春を病む

貝森

光洋

新聞に重さありけり春を病む
永き日の動かす夫つまの重き尻
盲目めしいゆえ落ちたにあらず雀の子
気をつけの姿勢の好きなシクラメン
紅を得て桜大樹の明け染める

春障子

笹村

政子

春潮の窪みに消ゆる鴉かな
塗雛のかんばせの艶友逝けり
少年の手に亀の子のうすみどり
鳥影や閉ざすともなき春障子
海峡のあかね一枚春夕焼

雪 卿 集

初 蝶

佐津のぼる

笛鳴きを耳にとらへて振り向かず
春よ来い種^{しゅびょう}苗の店にまねき猫
初蝶の触れゆく風の軽さかな
翳りたるときも明るき花菜畑
ずる休みして永き日をもてあます

縄 跳 び

志方 章子

縄跳びのびゅんびゅんびゅんと梅紅し
寒鯉の眠るにあらず跳ねにけり
春寒や接骨院の荒療治
春の雪傘を打つ音してきたる
春の雪養生中の苔濡らす

雪 卿 集

日 永

永田万年青

日永かな叩き出したる靴の砂
日永かな帰りたる子の手の汚れ
片付けの未だ終らぬ日永かな
大橋の点灯淡き日永かな
わが道を行ける雲雀の寄せ付けず

雪 柳

松本文一郎

丈五尺置きどころなき雛の間
三拜のお礼参りや梅真白
竹林の風収まれば百千鳥
手をかける主の無くて名草の芽
雪柳力を溜めて風の中

雪 卿 集

うすらひ

梶浦玲良子

馬蹄打つひびき木蘭散らしつつ
春一番二番いつ来る母の家
紅梅の香や大仏の薄まぶた
薄氷とあそびし傘の歩きだす
劇団を追ひかけてゆく春の月

仕上げ壁

市川伊團次

湯豆腐の一さじ分の幸に酔ふ
花吹雪そのひと片を掴みをり
花吹雪ひと時花の色 の道
跳び廻る両手を挙げる子にや花
花吹雪仕上げた壁に向ひをり

雪 卿 集

春の鴨

出口

誠

春の鴨さかんに足を回しけり
残る鴨つがひで川を流れけり
残る鴨流れに頭つけてをり
もう一度上流目指す春の鴨
春の鴨あらがふやうに流れけり



寒鯉の眠るにあらす跳ねにけり

志方 章子

繩跳のびゆんびゆんびゆんと梅紅し

寒鯉の眠るにあらす跳ねにけり

春寒や接骨院の荒療治

春の雪傘を打つ音してきたる

春の雪養生中の苔濡らす

かんごいのねむるにあらすはねにけり しかた あきこ

じつとしているはずの寒鯉が跳ねて驚いた。だが「驚いた」と直接言わず「眠るにあらす」と否定形を使って驚きを表現。寒中の鯉は底に潜み動きを最大限抑える。寒さに耐えているような姿に俳人は感興をそそられる。章子は「じつとしているなんてとんでもない」と言わんばかりに、寒鯉が跳ねたと言った。冬鯉の姿を「少し動いた」とか「鱗だけ動かした」など予定調和の句が多い中で、鯉の荒々しい本質を捉えたのだ。蛇足だが、俎板の鯉とは捕まると激しく抵抗するが、いったん板にのせるとあとは覚悟を決めたようにジタバタしない様子を言ったもの。だが、鯉が大人しいという意味ではない。鯉の本質は滝を登る絵のように水中の龍と言われるゆえん。

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

礫^{れき}

田尻勝子

春光に保線夫礫を積み足せる
電線の影路なりに春の逝く
紫木蓮の花びら流る小川かな
春嵐中空に鳥留まれる
なにやかや薫りに薫る弥生かな

柿 若 葉

筒井八重子

庭の梅実がふくらみし四月かな
暮の春惜しむがごとく柿若葉
柿若葉日々色変りゆきにけり
春蘭や朝日のあたる半日陰
山^{ゆす}桜^{らうめ}桃散り小さき実の目立つ

蛍雪譚

六甲選

*今月号から敬称を略す事にした。
なお採り上げない句もある。

二十六年六月号鑑賞

先月号の、

冬木の芽哭かせて月の国ざかひ

梶浦玲良子

について、『月の国ざかひ』とは『月下の国境』『月下』は『月の照らすところ』。さてこの句、どうして慟哭しているのが解ったのかというと、雨あとの強風が吹きさらし、雫が氷っているのが大声でなく涙に見えるのだ。蕭条とした光景」と書いた。が、月の国は月読命のすむ黄泉の国という意味も含まれていることに気づいた。そうすると「国ざかひ」の意味があこの世とこの世の境目というようにも思える。『古事記』によれば月読命は夜を司る神で天照の弟。太陽が昼の世界でこの世、月が夜の世界であの世、という考え方は自然の成り行き。玲良子もあの世とこの世の境目で見た月下の研ぎ澄まされた木の芽の慟哭を聞いたのである。ひとこと付け加えておく。(以下略)

六花集

春春鮎河道
 禽光子原端
 のやの鶺鴒に
 高姉の杉拾
 みの釘のひ
 に句煮上し
 啼碑発枝に写
 けの祥消真
 り文のえ牙
 義や海入廣
 経さ静り返畑
 道しかぬる育子

城手白紅毛
 跡に鳥梅糸
 の余のに編
 馬る宝少む
 洗国塚し指
 ひ史大遅の輪
 井大橋れ光
 戸系越て追
 草春しふ
 萌のに白ご平居
 ゆ風け開と
 る邪りくく滯子

日雛浴焼富
 永のけ牡士
 さな蠣壺
 に日がのを
 も細らカ背
 や目静ス負
 しでかタう
 のにネて
 髭見雪ツみ
 根入のトた
 取る降とる
 つ筆り弾牡
 て来け蠣
 をのたたの
 り筋るる殻
 住田千代子